2024年3月31日発行（創刊2002年3月31日）

仙台文学館ニュース

第四十六号

Sendai Literature Museum News

エッセイ

あかまつの道を抜けて

第8回――「終身履薄氷」

佐伯一麦

寒の時季に〝あかまつの道〟を歩くと、道脇に、薄く氷が張っているのを見かけた。子供心に帰ったように、そっと靴の先で踏むと、氷の下の水がうごき、やがて割れ目から滲み出てくる。それを靴底で感じながら、〈終身履薄氷　誰知我心焦（終身薄氷を履む　誰か我が心の焦がるるを知らん）〉という、若い頃から愛読してきた魏晋時代（三世紀）に生きた阮籍の「詠懐詩」の一節を諳んじた。

ある文学賞の選考会で、中国文学者の井波律子さんとご一緒する機会があり、選考後の雑談の折に、漢詩についていろいろと教えていただくのは愉しく、貴重な時間だった。阮籍についても話題に上ったことがあり、井波さんの師である吉川幸次郎が、「詠懐詩」を高く評価し、竹林の七賢の巨頭だったその人物を敬愛してやまなかったことを伺ったものだった。

吉川氏の「阮籍伝」によれば、阮籍は山東の東平の知事だったことがあり、驢馬にまたがって任地に着くと、役所の壁ついじをすっかり取りはらわせ、執務の様子を人民に公開した。文字通りガラスばりの政治を行い、しかも「政令は清寧」であったという。〈彼の一生は、道理に忠実な人間が、道理のあまり行われない世の中に生まれあわせた時、いかに生きるべきかを示す一つの型であった〉と吉川氏は述べる。

そんなことを思い、井波氏もコロナ禍のさなか、二〇二〇年の春に亡くなったことを振り返りながら歩いて行くと、林で、ギャーギャーとカケスの鳴き声が聞こえた。あまり姿は見かけない鳥だが、広葉樹が葉を落としているので、飛び交う姿が羽の付け根の青色とともに確認できた。

仙台文学館の池にも氷が張っており、その下で鯉がじっとしていた。日常はつねに、何かの渕をひそかに踏んでいる。今年は、元旦の能登地震、翌日の航空機事故と辛い年明けとなってしまったが、陰なる冬の寒さが極まったところから、一陽来復を迎えて陽気が立ち上り、晴れやかな花の春がやってくることを願いたい。

（さえき かずみ　作家・仙台文学館館長）

※「あかまつの道」は、台原森林公園と仙台文学館をつなぐ散策路です。

写真：佐々木隆二

CONTENTS

エッセイ
「あかまつの道を抜けて」佐伯一麦 ……1
シリーズ
「私の一冊」佐藤ジュンコ ……2
特集
「佐伯一麦 北根ダイアローグ2024」（抄録）……4
ミュージアムグッズのご紹介、展示のご案内 ……7
文学館日誌 ……8

シリーズ「私の一冊」第40回

佐藤ジュンコ

A・トルストイ再話 内田莉莎子訳 佐藤忠良画『おおきなかぶ』

中心部にあった小さな本屋さんにも、隣町の大きな本屋さんにも、よく連れて行ってもらいました。

「本だけは、なんぼでも読ませでやっかんな」

そう言われた記憶があり、大人になってから両親に確認したところ

「ほだごど言ったべが」

照れ隠しなのか、忘れているのか。もっと勉強をしたかったけれど、できなかった。せめて子どもには、本を読みたいだけ読ませてやりたい。そんな思いがあったのでしょうか。

進学で仙台に引っ越して、宮城県美術館で『おおきなかぶ』に再会しました。絵を描かれた佐藤忠良さんは宮城出身の彫刻家で、館内の一角に佐藤忠良記念館があります。『おおきなかぶ』の絵は、改めて見るとなんとも愉快で驚きました。かぶが大きく育ち、親指と片足を上げて喜ぶおじいさん。かぶが抜けず、膝を抱えて座り込み、うつむくおじいさんの隣りで、心配そうに様子をうかがうおばあさん。かぶを囲んで立ち尽くす人間たちと犬、駆け寄る猫とねずみ。書き出すときりがないくらい。なんてチャーミングで人間味あふれる愛おしい絵本なのでしょう。佐藤忠良さんのこともとても好きになり、宮城県美術館にも美術にも、より親しみを抱くようになりました。

卒業後、ぼんやりふらふら暮らしていた時期に、見かねた友人からの

「好きなもののそばで働くといいよ。好きなものの近くにいると、きっといいことがあるよ」

との助言に「本が好きだから、本屋さんで働こう」と思い立ち、仙台駅前の大きな書店に電話をかけて面接を受けて、翌日から十二年間、書店で働きました。ちなみに、その友人も「私そんなこと言ってた?」とのこと。人生を動かす大事なひとことは、思いのほか軽やかに手渡され、記憶に残らないものなのかもしれませんね。

書店にはいつも『おおきなかぶ』がありました。翻訳した内田莉莎子さんの名前を、たくさんの本の表紙で見かけるようにもなりました。小さいころに読んだあの本も、宮城県美術館で開催された絵本「こどものとも」シリーズの原画展で見たあの本も。レジカウンターでお客さまから差し出され「おや、この本も」と気付いたこともたくさんあります。本のそばにいて、少しずつ世界が広がっていくのが、毎日とても楽しくて幸せでした。

東日本大震災が発生した日も、書店にいました。地震のあと、私は何もできなかった。自分の手足を動かして、誰かの命や生活を助けたり、地域の役に立つようなことは、何ひとつできなかった。沿岸部でボランティア活動に参加する友人や、避難所で忙しく立ち働く友人たちの話を聞くと、後ろめたく、申し訳なく、情けないような気持ちになることがありました。

書店が営業を再開し、本のある日常を少しずつ取り戻すことを喜んでくれるお客さまに、どれだけ救われたことか。本を売っても失われたものは戻ってこない、と落ち込んだりもしたけれど、それでも本の力と言葉の力を信じて働くしか、私にはできなかった。

A.トルストイ再話
内田莉莎子訳　佐藤忠良画
『おおきなかぶ』
（初版1966年　福音館書店）

うんとこしょ　どっこいしょ
まだ　まだ　まだ　ぬけません。

『おおきなかぶ』に初めて出会ったのは、小学校の国語の教科書でした。集団行動にあまり向いていないかもしれない、とぼんやり感じながらも、声を合わせてリズミカルな文章を読むのは、楽しかったような気がします。かぶを抜くのを手伝う孫よりも、おじいさんおばあさんに年齢が近づきつつあるいまでも『おおきなかぶ』を読み返すときはいつも、文字と意味を追うだけではなく、心の中で言葉を、音のひとつぶひとつぶを楽しむように読んでいます。

小さなころから本が好きで、町のいろんな大変な出来事が続いています。「いま何が起きているか知らなくては、考えなくては、何かしなくては」と思い込み、情報に疲弊して回復できずにいるうちに、またつらい出来事があって……の繰り返しです。心がすり減ってしまいそう。情報と距離を置くのが必要なこともある、と頭ではわかっているのに。

そんなとき、『おおきなかぶ』の最後に登場するねずみのことを、ちらりと思い出すのです。かぶをひっぱるおじいさん、おじいさんをひっぱるおばあさん、おばあさんをひっぱる孫、孫をひっぱる犬、犬をひっぱる猫、猫のしっぽに自分の細いしっぽをからませてひっぱる、一番うしろにいる小さなねずみ。体力的にも精神的にも社会的にも力を持たない私でも、いつか少しでも役に立てるときが来るかもしれない。ちょっと強引な解釈ではありますが、そう思うと少し慰められます。

いまいる世界がつらいとき、本の中に心を置いて、心を休ませて、守っていい。それもまた本の役割なのだと、いま改めて思います。

本屋から離れて、書く側になってもうすぐ十年です。私も誰かの心の休憩所になれるような本を書けるようになるでしょうか。うんとこしょ、どっこいしょ、まだ、まだ、まだ、まだ、かぶは抜けなくても、こつこつ、こつこつ、この街で描いて、書いて、生きていこうと思います。

版画：明才

佐藤ジュンコ
さとう じゅんこ

イラストレーター。1978年、福島県伊達郡霊山町（現・伊達市）生まれ。仙台市在住。仙台駅前の書店に勤務しながら、手描きマンガの「月刊佐藤純子」を友人知人に押し配りするうち、イラストの仕事をするようになる。2014年に書店を退職。2015年にイラストレーターになる。著書に『佐藤ジュンコのひとり飯な日々』『佐藤ジュンコのおなか福福日記』『マロン彦の小冒険』（ミシマ社）、『月刊佐藤純子』（ちくま文庫）などがある。河北新報夕刊「街で会いましょう」、せんだいタウン情報 S-style「佐藤ジュンコ探偵局」、福島民友タッチ「ただいまふくしま」など連載中。

特集

佐伯一麦 北根ダイアローグ二〇二四 ～仙台の文学 むかし・いま・これから（抄録）

当館館長の佐伯一麦が、各分野で活躍している方を迎えてお話を伺うシリーズ企画「北根ダイアローグ」。第五回目は、企画展「仙台文学館の語り部たち～資料でたどる文学の記憶」（会期2024年1月20日～3月17日）の関連イベントとして、仙台市出身の直木賞作家・熊谷達也さんと山形市出身の文芸評論家・池上冬樹さんをゲストにお迎えし、仙台と文学のかかわりについて語り合いました。

（写真：佐々木隆二）

佐伯一麦（以下、佐伯） お二人とももうずいぶん長い付き合いになりますので、今日はいろいろ積もる話をざっくばらんに話せるのではないかなと思います。

池上冬樹（以下、池上） 佐伯さんとは一九九五年に山形で、熊谷さんとは九八年ごろに佐伯さんの集まりで知り合った。二〇〇〇年から山形小説家・ライター講座の世話役をやっていますが、毎年佐伯さんと熊谷さんに常連講師として来てもらってました。せんだい文学塾が出来てからは仙台講座に移ってもらいましたが。

熊谷達也（以下、熊谷） 大した話はできないと思うんですが、小説を書く人間ってこんな変な人たちなんだなっていうのを知って帰ってもらえれば、このひとときを楽しく過ごせるんじゃないかなと思います。

熊谷達也（くまがい たつや）
1958年仙台市生まれ。作家。2004年『邂逅の森』で山本周五郎賞と直木賞のダブル受賞を果たす。東日本大震災をきっかけに、気仙沼市がモデルの港町〈仙河海〉を舞台にした「仙河海サーガ」シリーズを発表。近著に『無刑人 芦東山』『明日へのペダル』『孤立宇宙』などがある。

池上冬樹（いけがみ ふゆき）
1955年山形市生まれ。文芸評論家。長年、各文学賞の下読みや予選委員、「山形小説家・ライター講座」と「せんだい文学塾」の世話役を務めている。2014年より宮城学院女子大学非常勤講師。2019年から23年まで東北芸術工科大学文芸学科教授。

◆書く仕事は一生もの

佐伯 熊谷さんが直木賞をとるちょっと前に、『麦笛』（注1）という雑誌の第四号で熊谷さんに対談をお願いしたんです。その中で今でも覚えてるのは、熊谷さんが保険の代理店をやっていた時に、アポが一件も取れなかった日があった。それが新人賞に応募する一つのきっかけになったと。

熊谷 そうですね。子供の頃からずっと本が大好きで読んでて、書くのも好きだったんです。ものを書いて生活ができたらどんなにいいだろうなと最初に思ったのが十四歳の頃で、本気で物書きになりたいと思ったのは二十歳くらい。予備校生活をしながら作品を書いてコンテストに応募したりして、プロの作家になったらこの浪人生活から逃れられる、みたいな希望を持っていたんですが、大学に入って気分が安定するとコロッと書かなくなりました。そのまま十年、二十年くらい経った。保険の仕事をやっていて、車に乗ろうとした矢先、ふと「（アポが取れなくて）行き先が無い、どうしよう」と思って。ちゃんとした商売人ならきちんと飛び込み営業をして新規開拓するんですが、なぜかその時「俺は何をしたくてこれまで生きてきたんだろう」と、ちょっと真面目に考えちゃったんですよ。十四歳の時ものを書きたいと思って、二十歳の時に初めて書いてみた。でも、これからやっても遅くないんだろうなと思ったんです。いくつからでも始められる。

池上 デビューは何歳でしたっけ。

熊谷 三十九歳。

佐伯 二十五年くらいかかったんですかね、十四歳からですから。

池上 書く仕事はね、一生ものですから。いくらでも、六十過ぎても全然OK、七十過ぎてもOKですね。書く仕事は年齢・学歴、全然関係ありませんから。

◆純文喫茶「集（つどい）」と佐佐木邦子

佐伯 仙台の二日町に、戦後の文芸誌を全部お店に置いているような喫茶店があったんです。「集」っていう。そこでたまに熊谷さんと会ってお酒を飲むという時期がありましたね。

熊谷 昔ながらの喫茶店なんですが、壁一面に純文学系の文学誌があって。そこの文学好きのマスターが、「仙台からまた一人作家が出た」って歓迎してくれて。一番印象に残ってるのは、マスターに誘われて、佐伯さんと佐佐木邦子（注2）さんと一緒に三人そろって、バケツ二つ分くらいの茹でた根曲がり竹にマヨネーズをつけて、お酒を飲みながら食べました。その時マスターが、一番年上の佐佐木邦子さんに「あなたはお姉さんなんだから、後輩の佐伯くんとか、新しくデビューした熊谷くんの面倒を見なきゃいけないんだよ」みたいなお話をされてたのを、今でも風景とともに思い出せます。ああいう場所っていうのは、本当はあったほうがいいですよね。

池上 そこに行けば誰か必ず作家や作家志望者がいる、そういった人間と会うっていうことは刺激を受けますのでね。コロナでそういった集まりがなくなっちゃったので。

佐伯 佐佐木さんは一九八五年「卵」という作品で中央公論新人賞を受賞して、そのまま芥川賞候補にもなった。この中央公論新人賞が、今はもうないけども僕たちの中では芥川賞をとるより難しいんじゃないかって言われた賞なんですよ。非常に厳しい選考で、これの受賞はとても画期的だった。仙台には『仙台文学』という老舗雑誌があるんですけど、佐佐木さんはその有力な書き手で。芥川賞候補になった後も、佐佐木さんはここに書いていた。震災の時の津波をたとえた「黒い水」という作品だったんですが、仙台の自然をとても愛して、それが喪われたのを悲しんでというのが分かる作品でした。その後体調を崩されて亡くなったんです。

池上 中央公論新人賞って本当にあの頃は一番華やかで、一番信頼のおける新人賞でしたね。昔から文学をやっている人は一目を置く、みんなが欲しがる、なかなかとれない新人賞だったんです。それを佐佐木さんがとったというのは本当にすばらしいことでした。

◆井上ひさしについて

佐伯 熊谷さんが二〇〇四年に『邂逅（かいこう）の森』で山本周五郎賞と直木賞をダブル受賞した時に、当時仙台文学館館長だった井上ひさしさんと対談されたんですよね。

熊谷 そうですね。いろんな話をしたんですけど、うれしいなと思ったのは、井上さんが会場のお客さんに「どうぞ応援してあげてください。地元の作家をね、せっかく出たんだから。応援のしかたは一つしか無いです。本を買いなさい。」って。まさにそれはうれしかったです。

佐伯 井上ひさしさんについて、池上さんはどうですか？

池上 やっぱり大した作家ですよ。僕はミステリ評論家でもあるんですけど、井上さんのミステリの技はね、ミステリ作家よりも富んでいる。技巧も富んでるしプロットも素晴らしいです。ミステリでも戯曲でも、読者をもてなすというか、読者を驚かせるサービス精神という点では、井上さんを超える作家はいないんじゃないですか。ミステリ作家としての井上ひさしはもっと評価されていいと思いますね。

熊谷 僕が井上さんに恩義を感じているのは、僕がデビュー後に『山背郷（やませごう）』という短編集を書いたんですが、ほぼ方言だらけなんですね。東北弁をどうやって全国どんな人にも伝わるように書くか、という時に、井上ひさしさんが既に『吉里吉里人』でやっていた、漢字に方言でルビを振って、ルビで音を読ませて意味は漢字で取らせるっていう手法を、「あ、これ使えるな」と思ってやってみたら上手くハマったんです。井上さんの作品を読んでなかったら、多分今の僕はないと思います。

池上 方言を小説に使うって簡単に見えるけど、書けないです。それを熊谷さんはちゃんと書くんですよ。それはもちろん井上ひさしさんのおかげかもしれませんけど、やっぱり熊谷さんは耳が良いと思う。『本の雑誌』の方言小説の特集で、作家の黒川博行さんと熊谷さんと鼎談したことがあるんですが、やっぱり黒川さんも熊谷さんも同

じことを言ってましたね。「何回も音読する」と。音読して自分の言葉が、この表現でいいのか、この響きでいいのかを確認するという。

熊谷　最近でこそあまりしなくなりましたけども、最初の頃はやっぱり声に出していましたね、会話文のところは。

◆大佛次郎と大池唯雄（注3）の往復書簡集

熊谷　今回（の鼎談の）お話を頂いた時に、文学館から『大佛次郎・大池唯雄往復書簡集』を送ってもらいました。企画展でも紹介されている通り、大佛さんと大池さんはずっと手紙のやりとりをしてるんです。この書簡集を初めて読んだんですが、その辺の小説を読むより面白いです。将来小説家志望で頑張ってる人は、いろんなノウハウ本読むよりもこれを読んだほうがいいかもしれない。大佛さんが弟子である大池さんに向けて書いてる言葉がね、さらっと書いてあるんですが実に重くて真実を突いているんですよ。どういう心構えで小説を書くんだよとか、いい作品はこういうものとか、そんなに具体的ではないんですが、大事なところを大池さんに、本当に愛情をもって教えている部分がね、なんか泣けてきましたね。

佐伯 一麦（さえき かずみ）
1959年仙台市生まれ。作家、仙台文学館館長。著書に『鉄塔家族』『ノルゲ』『還れぬ家』『渡良瀬』『山海記』『アスベストス』『Nさんの机で』など多数。近著は『川端康成の話をしようじゃないか』（小川洋子氏との共著）。

佐伯　書簡というと、夏目漱石が学生だった久米正雄や芥川龍之介に対して、牛のようにうんうん押しなさい、というような有名な書簡を残してるけれども、それに匹敵するような励ましというか、お互いのやりとりがありましたね。

◆終わりに

佐伯　これからの執筆の予定とか抱負を伺えれば。

熊谷　そんなに大げさな展望は無いんですが、子どもの頃すごく好きだったSFを書いてみたいなっていうのが一つと、自分がこの二十何年やってきて、やっぱり蓄積したものはあるなと。小説の書き方を教えることは基本できないんですが、単純な技術は教えられるような感じはするんですよ。それを伝えていくのも、仙台でやっていることの恩返しになるのかなと。元々東京に行く気はさらさらなかったんですよ。東京が嫌いなんじゃなくて、東京から発信してるメディアがまるで日本全国そうみたいな発信のされかたをすることがいやなんだなと。この仙台の地で、残り何年生きられるか分からないんですがね、恩返しもしたいなとか。

池上　昔の作家はみんな地方に住んでいても東京を舞台にして書かなくてはいけない気持ちがあった。今は普通に地方を舞台にした作品が増えていますが、それでもまだ大都市中心にはかわりない。エンタメは特に地方を舞台にした作品がなかなか無かったんです。仙台でいうなら、大藪春彦とともに国産ハードボイルドの始祖といわれる高城高の存在が大きい。戦後の仙台市を舞台にした傑作をいくつも書いている。仙台の出版社の荒蝦夷が『X橋付近　高城高ハードボイルド傑作選』として刊行し、高城高再評価の機運を高めた。あとはやはり伊坂幸太郎さんの功績が大きい。地方の、今まで舞台にならなかった舞台を使って、エンターテインメントとして非常に素晴らしい作品を書いている。

佐伯　話は尽きない感じはありますけども。文学の言葉というのは意味を伝えるためだけではなくて、その言葉が作り上げている姿とか態度を持っているんです。だから文学というのはストーリーだけではなくて、その作品自体が持っている姿・形、生きている人間に通じるようなものに触れるということも大事なのかなと。そういう姿に出会うために文学館があったらいいだろうし、今日ここでの語らいも皆さんにそういう言葉の姿が伝えられたならうれしいかなと思います。どうもありがとうございました。

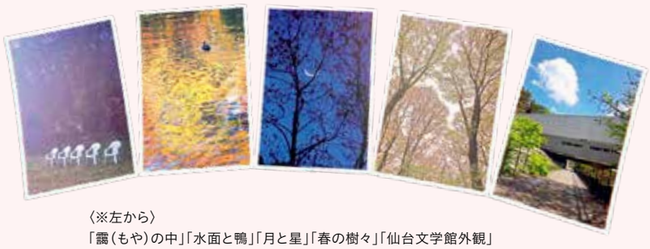
（2024年2月18日開催）

注1：仙台の文芸同人誌。佐伯館長が講師を務める。
注2：一九四九～二〇一六　作家。仙台市出身。
注3：一九〇八～一九七〇　作家。宮城県柴田町出身。一九三九年、東北出身作家として初めて直木賞を受賞。

仙台文学館　ミュージアムグッズのご紹介

フォトポストカード（5種類）

本紙巻頭、佐伯一麦館長のエッセイの写真を手がけている写真家・佐々木隆二さんが撮影した、文学館周辺の風景がポストカードになりました。ＳＮＳでのやりとりが主流の時代ではありますが、お好みの１枚を選んで、どなたかにお便りを送ってみるのも新鮮かもしれませんね。お得な５枚セットもあります。



〈※左から〉
「靄（もや）の中」「水面と鴨」「月と星」「春の樹々」「仙台文学館外観」
各120円（税込）　5枚セット500円（税込）

木版画「北根の杜」（額装）

仙台文学館の森（愛称：北根の杜）をイメージした可愛らしい木版画「北根の杜」が、2023年12月にミュージアムグッズに仲間入りしました。本紙「私の一冊」シリーズの挿絵を担当している木版画家・明才（みょうさい）さんによる作品です。額装済みなので、そのまま飾ることができます。ご自宅でも、北根の杜のゆったり時間を感じられるかも。

20,000円（税込、額付き）※限定3点
サイズ（額）40cm×31cm

どちらも仙台文学館受付で販売中です。
その他にもいろいろなグッズ・図録がございます。詳細は仙台文学館ホームページでご案内しています。
https://www.sendai-lit.jp/goods/zuroku
https://www.sendai-lit.jp/goods/museum

予告　2024年度　展示のご案内

当館は2024年度、開館25周年を迎えます。地元ゆかりの詩人・石川善助の特別展を皮切りに、さまざまな展示を予定しています。どうぞお楽しみに！

2024年4月27日（土）～6月30日（日）
25周年記念特別展
「詩人・石川善助をたずねて～北方への道のり」

石川善助（1901～1932）

2024年7月20日（土）～9月8日（日）
夏休みこども文学館えほんのひろば
「せとうちたいこさんにあいたーい！　長野ヒデ子　絵本と紙芝居」
＊展示以外の催し（「絵本の部屋」など）は8月25日（日）まで。

2024年10月5日（土）～12月15日（日）
特別展「文豪、仙台ニ立チ寄ル。」

2025年1月12日（日）～2月11日（火・祝）
新春ロビー展
「第23回　100万人の年賀状展」

2025年1月25日（土）～3月23日（日）
企画展「大沼英樹写真展（仮称）」

※展示の会期、名称は変更になる場合があります。

文学館日誌

2023年8月～2024年2月

①リーディング「宇宙大作戦 グスコーブドリ・ミッション」（作・石川裕人）のワンシーン。

②小説、エッセイ、インタビューなど、多彩な著作を通して伊集院さんのご活躍を偲びました。

③「仙台歴史ミュージアムネットワーク（歴ネット）」の企画として、今回で12回目となる伝統門松の再現。当館のほか、ミュージアム施設など市内各所で展示しました。

④2008年、寂聴さんが来館された際に書いていただいた色紙もあわせて紹介しました。

8月	20日	夏休み企画の「こどもの本のへや」「おはなし会」はこの日で終了。
9月	8日	前日、NHK仙台放送局「てれまさ」で「高山樗牛 瞑想の松」に関する特集が放送されたのを受け、2階情報コーナーに「瞑想の松」についての解説パネルを設置。
	10日	夏休み企画「こども文学館えほんのひろば ささめやゆき物語」会期終了。
	12日	外看板と館内のバナーを企画展「石川裕人 演劇に愛をこめて」に掛け替え。
10月	7日	企画展「石川裕人　演劇に愛をこめて」オープン（12月17日まで）。同展関連イベント リーディング「宇宙大作戦 グスコーブドリ・ミッション」を開催。〈写真①〉
	15日	第64回「晩翠わかば賞・晩翠あおば賞」贈呈式を開催。同賞は東北地方および仙台市国内姉妹都市の小・中学生による詩作品に贈られる賞。
	21日	企画展関連イベント 鼎談「石川裕人とその周辺」を開催。
11月	3日	企画展関連イベント リーディング「ユウジンのマルジナリア」および対談「石川裕人の残響から」を開催。
	19日	企画展関連イベント 演劇ユニット石川組公演「修羅ニモマケズ」開催。
	24日	当館で職場体験学習を行った市内の中学校3校の生徒さんによる「おすすめの一冊」の紹介パネルを、2階ギャラリーに設置。
	25日	24日に逝去した作家・伊集院静さんの追悼コーナーを、2階情報コーナーに設置。伊集院さんは1996年から仙台に居住。「仙台文学館ニュース」第4号への寄稿や、ライブ文学館への出演などでお力添えをいただいた。〈写真②〉
12月	2日	企画展関連イベント ギャラリートーク「石川裕人（ニュートン）の思い出あれこれ」開催。
	3日	企画展関連イベント リーディング「時の葦舟 無窮のアリア」開催。
	14日～17日	SMMAミュージアムユニバース（会場：せんだいメディアテーク）に参加。
12月	17日	企画展「石川裕人　演劇に愛をこめて」会期終了。
	19日	外看板と館内のバナーを企画展「仙台文学館の語り部たち～資料でたどる文学の記憶」に掛け替え。
	20日	1階エントランスに伝統門松を設置〈写真③〉。2階情報コーナーに「ライブ文学館『ブラザー軒』の詩人 菅原克己の詩を歌う」の紹介パネルを設置。
1月	10日	今回で22回目となる新春ロビー展「100万人の年賀状展」オープン（2月12日まで）。市民のみなさまから寄せられた個性あふれる年賀状を展示。
	20日	企画展「仙台文学館の語り部たち～資料でたどる文学の記憶」オープン（3月17日まで）。
	26日	「瀬戸内寂聴師を偲ぶ会」から仙台市に瀬戸内寂聴現代語訳『源氏物語』10巻本が寄贈されたのを受け、2階情報コーナーにてお披露目の展示を開催。〈写真④〉
2月	18日	企画展関連イベント 佐伯一麦 北根ダイアローグ2024「仙台の文学　むかし・いま・これから」を開催。ゲストは作家・熊谷達也さんと文芸評論家・池上冬樹さん。（本紙4～6ページ参照）

交通のごあんない

■バス利用の場合

〈宮城交通バス〉

○仙台駅西口バスプール2～4、6番乗り場
仙台北・泉地区方面行
（北山トンネル経由を除く）

〈市営バス〉

○仙台駅西口バスプール6番乗り場
八乙女駅行

※いずれも「北根二丁目・文学館前」下車

■地下鉄利用の場合

地下鉄南北線「台原駅」下車、
南1番出口より徒歩約25分
（台原森林公園内あかまつの道経由）
※山道です。雨天時は道が滑りやすくなりますので、ご注意ください。

■駐車場40台（無料）

台数に限りがございます。なるべく公共交通機関をご利用ください。

カフェ ひざしの杜

お食事、デザート、各種お飲み物などをご用意しています。
お得なランチメニューもあります♪

［営業時間］
10:00～16:00（ラストオーダー15:50）
※ランチは10:00～14:00
TEL 022-219-1341

仙台文学館ニュース　第四十六号

公益財団法人
仙台市市民文化事業団
仙台文学館
〒981-0902 仙台市青葉区北根 2-7-1
TEL 022-271-3020　FAX 022-271-3044
https://www.sendai-lit.jp/

「仙台文学館ニュース」のバックナンバーを掲載しています。

この印刷物はリサイクルできます。